

多職種協働による ポリファーマシー対策

名古屋大学医学部附属病院地域連携・患者相談センター 鈴木 裕介

KEY WORDS

- ポリファーマシー
- 多職種協働
- 医薬連携
- 権威勾配

Reduction of polypharmacy by
interprofessional work (IPW).
Yusuke Suzuki (病院准教授)

はじめに

高齢者診療における薬物療法の比重は大きく、特に外来診療においては投薬が主な診療行為である。医師にとっては「処方箋を書く(あるいは最近では電子カルテに打ち込む)」という行為は医師のみに裁量が委ねられている分、その責任を重大に受け止めて処方行為に当たらねばならない。しかしながら通常の多忙な診療業務において、処方という行為はついつい惰性に流されやすく自らの処方を顧みる(Prescription Review)機会は、初診の場合とはもかく、再診の患者においてはなかなか設けられないのではないだろうか。長年診察してきた患者の処方を見直し、ときに削減することは容易ではない。結果的に患者との付き合いが長いほど処方薬剤数は雪だるま式に膨らんでいき、この傾向は多愁訴を特徴とする高齢患者でより顕著になりポリファーマシーに至る。ではなぜ多くの薬を処方

する(服用する)ことが良くないのか。「高齢の患者はたくさんの薬を飲んでいるが、若年の患者と比較しても、特に薬による不快な症状を訴えやすいわけでもない。むしろ若い患者のほうがお薬には敏感なのだから、どうしてお年寄りにたくさん処方するのが良くないのだ」と疑問を投げかける向きもあるかもしれないが、高齢者においては愁訴の原因が薬剤に起因することに気づかない、あるいは自ら関連性を疑っても「せつかく出してもらったのだから」と伝えることをためらうこともままある。「長年服用して大丈夫なのだから」という理由は高齢患者には通用しない。なぜなら薬剤の有害事象発生リスクは加齢とともに変化するものであり、同じ患者が同じ薬を同じ用量で飲んでいてもその有害事象発生リスクは年代によって変化していくと理解すべきである。全国の処方箋調剤薬局における処方箋内容の解析によると、高齢者に特に慎重を要する薬[可能性とし